

石川・浄水寺跡

きよみずでら

- 1 所在地 石川県小松市八幡
- 2 調査期間 一九八四年(昭59)五月～一九八五年三月
- 3 発掘機関 石川県立埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 垣内光次郎
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 八～一五世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(小松・鶴来)

本調査は建設省のバイパス建設工事に伴うもので、調査地は加賀地方の中心地域として知られる小松市東部の開析丘陵上に位置する。

ここは「キヨミズデラ」の跡地として永年地元伝承されてきた場所である。

調査の結果、ここがまさしく「キヨミズデラ」の跡地であり、寺名を「浄水寺」と表記し、八世紀後半にその活動が開始され、一五世紀後半に移転するまで山間

の寺院として存続したことが明らかとなった。

浄水寺は定形化した伽藍配置の寺院ではなく、キヨミズ山から南東方向に弓張り状に派生した丘陵の支脈に三方を取り囲まれた小盆地の緩斜面を寺域として、内部に段状の整地面を大小約二〇面造成し、仏堂と掘立柱建物を配置した寺院である。寺域は逆V字形を呈し、南北約一一〇m、東西約一四〇mで、標高二六～三九mを測る。寺内の建物は、間口五間・奥行四間の仏堂一宇と房舎的な居住施設である掘立柱建物群で構成される。その他の遺構としては、大溝、池、室状遺構、木組井戸、土坑、参道、土器埋納穴などがある。

木簡が出土した大溝は、寺内の中央部に位置し、旧地形の小谷(沢状地形)と考えられるものである。各層から、九世紀後半～一世紀前半の墨書土器を多量に含む、須恵器や土師器などの遺物が、整理用コンテナで計約一三〇箱出土した。木簡はこの大溝の最下層から出土したもので、年代は九世紀後半と考えられる。

墨書土器は、大溝以外を含めて一二二点が出土した。そのうち、判読できるものは、六割強である。寺名の「浄水寺」を始めとして、寺名の略称である「浄水」「寺」などや、「前院」「南房」「南室」「仁房」「中房」「中室」「厨」などの寺内施設の名称と解される墨書群と、「弥」「弥来」「集」「富」「富集」「吉来」「大吉」「吉加」などの吉祥句や招福関連の墨書群の二群が大半を占める。他に「三坂万呂」「気丸」「成女」などの人名の墨書、「酒坏」「浄前坑」などの

用途を示す墨書、「神」「佛」「阿難」などの神仏の墨書、「吉谷寺」「春」「泉」などの墨書がある。

この他転用硯を中心に風字硯や猿面硯などが、約二〇〇点出土している。

8 木簡の积文・内容

- (1) 「今月□□恐物忌人者 楊丸子苾苾」
〔菩提薩埵〕

483×48×6 0.51

木簡は幅広の長方形の転用材で、下端を尖らせたものである。墨書は片面だけで、背面には漆状のものが塗られている。

内容は「今月□□恐物忌人者」が、字体が大きく、物忌に関する語句であり、「楊丸子」は人名と判断される。

木簡が出土した大溝には、多量の土器が投棄されていたが、これが月例的な宗教活動に関係するものであるとすれば、浄水寺での活動の一端が明らかになり、また墨書土器の性格の解明へとつながることになる。一一世紀前半の頃から、土器に代わって木製形代など

が多く見られるようになり、宗教活動に変質が起きたと考えられる。

その後、浄水寺の活動は、発展・停滞・中興の各時期を経ながら一五世紀後半まで継続する。さらに、寺院移転後も寺名と跡地が地元伝承されつつ、跡地に残ったキヨミズデラの池を中心とする雨乞い信仰を形成した背景には、浄水寺の性格が潜んでいると考えられる。

9 関係文献

石川県立埋蔵文化財センター 『浄水寺墨書資料集』〔浄水寺跡発掘調査報告書〕一 一九八九年

(垣内光次郎)

